



識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする新連載。第7回はゴルフクラブの女性メンバーのお話です。

男女差別が黙認される ゴルフクラブのポリシー。

ゴルフの総本山とも言うべきスコットランドのロイヤル・アランド・エンシエント・GCC・オブ・セントアンドリュース(R & A)は今、歴史的な改革が起ころのではないかと注目を集めています。260年の歴史で初めて、2400人のメンバーによって女性会員受け入れをめぐる投票が今年の9月に行なわれるからです。

21世紀の文明国にあって、ゴルフクラブは未だ男女差別が黙認されている珍しい場所と言つてさうかもしれません。Gentlemen Only」を頑に守つてくるゴルフクラブは世界にまだ多くあります。一方で2012年に初めて女性メンバーを迎えたオーガスタナショナルGCCをはじめ、女性会員を受け入れるクラブも増えてきています。オーガスタの影響を受けてか、去年の全英オープン舞台となったミュアフィールドGCCでは女性メンバーを認めていないことが現地メディアで大きく取り扱われ、国会でも審議されました。

全英オープンが開催されるゴルフ場では、他にもロイヤル・セントジョージズGCCとロイヤル・トルウィンGCCも女性メンバーを入れていないことが問題視され、去年の全英オープンの開催前にはR & Aの見解が注目されていました。代表のピーター・ドーン氏は「クラブが女性メンバーを入れないのは男女の差別ではなく、クラブのポリ

リシーとして捉えるべき」とコメント。その総本山もオーガスタのように女性メンバーを受け入れる方向に動きつつあるようです。

その流れを汲んで先述のミュアフィールドGCCも男性メンバーのポリシーを緩めることを考えているようです。今回のR & Aの方針も理由の一つかも知れませんが、去年の全英オープン・チケットの売上げが、女性グループの反対運動を受けて予想の17万人を大きく下回る14万人にとどまつたことも痛手となっているはず

Vol.7

英国での女性受け入れの動き

でも、女性会員が認められなかった歴史は、ゴルフ発祥の地である英国の文化的な背景に端を発しているのではないかと、私は考えます。

男性オンリーの影響は 英国の社会背景が原因？

ひとつは、R & Aの歴史よりもっと古い1440年に開校したイートン校(英国の男子全寮制パブリックスクール)など、イギリスの中心になる人物を輩出して来た名門校が男子校だという点です。そこでは学業だけでなく、スポーツにも力を入れてリーダー達を輩出してきました。イートン校は現職のキャメロン首相を含めて19人の総理大臣を輩出しています。現在でも多くの名門校は男子校で、卒業して社会人になると大抵はGentlemen's Clubと言つたクラブに集まるようになります。

R & Aでの女性受け入れを巡る投票が世界を変える!?



わゆるOBによる特別なクラブは政財界を動かす影響力も持ち合わせています。ゴルフクラブもその延長にあるため、女性が入っていく受け皿となつていなかったのです。

また、イギリスは紳士の国とも言われ、英国男性は小さい頃からレディーファーストを教えられて、家長となり稼ぎ頭となつても奥さんにはしつかりサービスするダンナが多いのです。彼らがパパなどで「家における自分の立場はカミさん、子供、馬、の順で自分は犬と猫の間」と自慢話のようにボヤクのをよく聞きます。そんな旦那さんが奥さんのことを気にせずゴルフが楽しめる環境を……という考えもあるのでしょうか。

個人的には旦那さん達の、気の置けないゴルフ仲間との社交場は守るべきだと思いますが、世界の名門ゴルフクラブでも女性会員が新しい流れを作っていくことに期待もしています。さて、R & Aの投票はどのような結果を迎えるのか注目されますが、ゴルフ界は、新たな改革が刻まれる時を待つべきかもしれませんね。

ゴルフビジネスのプロフェッショナル



神野方仁(じんの・みちひと) 1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメ

ジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト/ソリマチアキラ